

審査の結果の要旨

氏名 豊口 真衣子

本論文は、18世紀英国における廃墟崇拜に関する建築学的研究である。18世紀のイギリスではピクチャレスクやロマン主義、ゴシック・リヴァイヴァルの興隆のなかで、廃墟への関心が高まり、「廃墟崇拜」とも呼べる現象が生じた。18世紀は風景式庭園が造成されていく時代であるが、その際にグランド・ツアーでもたらされたイタリアの風景画や廃墟画の世界を庭園に移すという試みがみられた。

サンダーソン・ミラー (Sanderson Miller, 1716-1780) はゴシック様式の人工廃墟の設計を得意とした。そこで本研究はミラーが造った人工廃墟に焦点をあて、18世紀における廃墟崇拜を促進する上で、ミラーが果たした重要性を明らかにすることを目的とする。ミラーは1740年代以降のゴシック・リヴァイヴァルの先駆者であり、同時代のホレス・ウォルポール (Horace Walpole, 1717-97) とともに、1740年代、1750年代をとおしてゴシック・リヴァイヴァルを推進した第一世代にあたる。

第I部1章で廃墟に関する先行研究をみたらうえで、2章において庭園史を概説する。

3章では18世紀に廃墟崇拜がおこることになった背景を考察する。具体的には、ヘンリー8世の修道院解散とピューリタン革命によって、イギリスに元々多くのゴシック様式の廃墟が存在し、これは古事物愛好家の出現につながった。また17世紀から行われたグランド・ツアーにより、イタリアの風景画、特に廃墟画がイギリスにもたらされた大きな流行をみた。これらのイタリアの風景画、特に廃墟画がイギリス芸術にもたらした影響関係をみたと、実際に風景画の世界が風景式庭園に移される過程をみていく。また18世紀の廃墟の美学が廃墟崇拜を理論的に支えたことから、理論家たちの言説を追っていく。さらに建築におけるゴシック・リヴァイヴァルの興隆においては、ゴシック文学の影響が強かった。

4章では18世紀におけるゴシック・リヴァイヴァルの興隆をバティ・ラングレイ (Batty Langley, 1696-1751) を中心に分析し、古典主義とゴシックの様式論争をみていく。

5章では、廃墟崇拜の高まりとして実際に庭園で廃墟がとりこまれていく過程を「借景」、「移築」、「人工廃墟」の例を通してみていく。「借景」としての廃墟の例としては、ウェールズにあるティンターン・アビー (Tintern Abbey) の修道院廃墟と、ヨークシ

ヤーのスタッドレイ・ロイヤル (Studley Royal) の庭園におけるファウンテンズ・アビー (Fountains Abbey) の修道院廃墟をみる。「移築」の例をみたあと、本研究のテーマである「人工廃墟」が称揚された例をみていく。

6章ではジェントルマン建築家サンダーソン・ミラーに焦点をあて、18世紀前半における「ジョージアン・ゴシック」の台頭のなかでミラーを捉える。ここでミラーに関する先行研究の流れを整理しながら、既往研究の問題点と本研究の問題意識を明らかにしたうえで、本研究で用いる一次資料を説明したあと、ミラーの略歴について触れる。

7章以降では、ミラーが設計した人工廃墟をケース・スタディとして扱う。具体的には7章で、ウォリックシャー (Warwickshire) にあるラドウェイの地所で造ったラドウェイ・カースル (Radway Castle) を分析する。ラドウェイ・グレンジは、18世紀を代表する小説家ヘンリー・フィールディング (Henry Fielding, 1707-1754) の『トム・ジョウンズ』(1749)の舞台とされており、小説中の描写をみたあとで、詩人のウィリアム・シェンストーン (William Shenstone, 1714-1763) による描写と比較しながら、当時の造園の様子を明らかにする。最後にラドウェイ・カースルの建設経緯を明らかにし、この人工廃墟がピューリタン革命と「エッジヒルの戦い」を想起させるために造られたことを明らかにする。

8章ではウスターシャー (Worcestershire) にある、ミッドランド地方の3大風景式庭園にかぞえられるハグリー・パーク (Hagley Park) で、ミラーがジョージ・リトルトン (George Lyttleton) のために設計したハグリー・カースル (Hagley Castle) を扱う。まずハグリー・パークと施主のリトルトンをみたあとで、ハグリー・カースルの建設経緯を史料をもとに明らかにする。

9章ではケンブリッジシャーで最も壮大で重要な地所ウィンポール・パーク (Wimpole Park) で、ミラーが設計したウィンポール・カースル (Wimpole Castle) を扱う。ウィンポール・カースルはミラーが設計したが、実際には造園家ランスロット・「ケイパビリティ」・ブラウン (Lancelot "Capability" Brown, 1715-1783) の監督下において、ケンブリッジを中心に活躍した建築家ジェームズ・エセックス (James Essex, 1722-1784) が実施した。これはミラー風の廃墟が模倣された良い例である。10章は以上の論考をまとめた結論である。

この研究はわが国における18世紀の建築と庭園史研究に貢献するものであり、博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。